

『知 慧 論』

— テクストとディスクール — (1)

末 松 壽

序

《不快にうんざりさせる》シャロン

パスカルが《自己自身の認識を論じた人々》の代表としてモンテーニュと並べてあげたピエール・シャロン¹⁾の主著、『知慧論』(1601年、第2版1604年)²⁾全三巻のテキストとそこに展開されるディスクールについて考えよう。

但し『パンセ』は、その書の《区分》(divisions)が《不快にうんざりさせる》(fr.644-780)³⁾の一言でこれを片付けることは周知の通り。うんざりした人がこれを読破したという保証はない。ともあれこういう評価の所以は作品の構成を瞥見すればわかる。シャロン自身、《これら三巻の主題と秩序》なる端書の冒頭で次のように述べている：

第一巻は、人間に関する主要な五大考察によって、自己と人間の条件を知ることを教える。これが知慧の基礎である。それは62の章を含んでいる(*op. cit.*, p. 11)。

これはまだ『パンセ』作者の表明する不快の理由を十分に説明しない。作品の構成をも少し詳細に見れば次のようになる：

序 (総序ともいうべきもの)

第一巻 《自己および人間の条件の認識》

序 《自己研究および自己認識の奨励》

第一考察 《人間を構成するあらゆる部分に関する自然的な考察》(身体の形成から感覚、欲求、知性、情念などをめぐる33の章が入る)。

続いて、単独の章より成る第二、第三の考察があり、次いで第四の考察には、その内部に序及び5つの章が、そして第五の考察として第41章から第62章に到る都合22の章が位置する。第二巻《知慧の全般的な教えと規則》には12の章をみる。第三巻《知慧についての個別的な注意》には43の章があるが、これは4つに中区分されている⁴⁾。

そもそも《序》(Preface)と呼ばれるものだけでもあちこちに大小様々、実に11個も存在する。第一の(に)、第二の(に)という番号づけたるや数えきれぬも

のではない。区分の煩瑣さと共に、全体で117章を数えるという事実からも想像できるように、これが尨大な書物であるという事情もある。筆者の用いる本は、第二版において削除ないし変更された初版の箇所をも含むとはいえ、A4版で800ページをこえる。著者も《書物全体を読めないか読みたくない》読者への助言を与える程である (p. 461)。

さて、予備的な註釈に続いて、筆者にとって、この作品を読む契機となったある解説文を紹介しよう。

二つの問題

『17世紀文学生活序論』⁵⁾の中で、ジャン＝クロード・トゥルナン氏は、フランス17世紀がルネッサンスの遺産としてもっていた最大のものは異教古代が練り上げた知恵の思想であった、という。それはデルポイの神託に由来する人間認識・自己への関心に基礎をおくものであった。ところで氏によれば、世紀初頭におけるこのユマニズムの影響は《ピエール・シャロンのような神父の、誠実で公認されもした信仰が、どれ程までに古代の知恵、即ち異教的知恵に色づけされているかを確認すること》(p. 12) によってよくわかる、という。知恵なる標題だけでも⁶⁾、それは救済の教えよりは処生術 (art de vivre) を思わせるではないか。実際この書は《モンテーニュの『エッセ』の一種の倫理的総括》で、それが《断固としてキリスト教的な枠の中で示され、論文形式にアレンジされた》ものであった (Ibid.)。

解説は二つの問を提出する。一方において《断固としてキリスト教的な枠》(un cadre résolument chrétien) とはどういうことかという疑問。そこから、この作品における異教的なものキリスト教的なもの、哲学の言説と神学の言説との関係を探ることが必要になろう。他方、作品に関する『エッセ』の《一種の倫理的総括》(une sorte de bilan moral) とか《論文形式でのアレンジ》(arrangé en forme de traité) という評言は、『エッセ』から『知恵論』にかけてのテキスト間関係に関心を向けさせる。これら二つの問題を以下において考察しよう。

第一章 テクスト — モンテーニュからシャロンへ —

...j'ay questé par cy par là, et tiré la plus part des materiaux de cet ouvrage des meilleurs autheurs... (P. Charron).

§1 シャロンにおけるモンテーニュ

『知慧論』が『エッセ』のアレンジであるという評価については、まず二三の事実を確認することから始めよう。第一に「モンテーニュと親交がありその直弟子をもって任じた」⁷⁾といわれるシャロンが、作品の中でその師を名指すことはないという事実である。この書はその欄外を用いて、或いは議論の項目（いわゆる *sommaires*）を示し、それに番号を打ち、或いは主な引用には出典を明記している。本文で暗示される人名を記載することすらある（例えば p. 278）。ところが『エッセ』作者の名は、本文でもかかるメタテキストでも現れはしない。

第二に、だが冒頭には口絵があって、そこに《知慧》の寓意像が描かれている。その裸体の女性像が眺めている鏡（自己認識の寓意である）の下に《平和かつ僅か》なる銘句に向き合って『エッセ』を思わせずには措かないもう一つの銘句がある。曰く JE NE SCAY. この《我知らず》が『エッセ』とテキスト間関係をもつとしても、それが疑問文ではなく平叙文であることは、パスカルなどの解釈からすれば一つの裏切りか誤読ということになる。なぜならば彼は《レモン・スボン弁護》について語りながら、ド・サシ氏に向かってこう語ったという：

この自己への疑い、この無自覚の無知—それを彼は自分の支配形態とよんでいるのだが—の内にこそ彼の見解の本質はあるのであって、それを彼はいかなるポジティブな用語でも表現することはできなかった。もし自分は疑っているというならば、少くとも疑っているということを断言することになって—それは彼の意図にはっきりと反することである—、自分自身を裏切ることになる。それ故に彼は疑問の形でしか自分の考えを説明することはできなかった。こうして《私は知らない》と言いたくはないので《私は何を知っているのか》という。これを以て彼は自分の銘句とするのである⁸⁾。

勿論、無知の知の教訓はソークラテース以来の知慧あるいは愛知の伝統であってみれば、シャロンの銘句が不忠実に読まれた『エッセ』からのみ来ると断定することは軽卒とも見えよう。けれども両者の関係を否定することは更に不可能である。というのは、著者シャロンは全く例外的に生活者シャロンについて語り、《私はここで1600年にコンドンに建てさせた小さな家の戸にこの《Je ne scay》なる語句を刻ませたことを申し上げる》(p. 402)と書いているのである。これはモンテーニュその人のあの天秤の故事に倣う身振りに他ならない⁹⁾。とすれば、銘句として平叙文を用いる時、シャロンはそれが師のそれとは異なることを知っていたことになる。そこには一つの意図的な選択があったと見てよい¹⁰⁾。

第三に、第一の指摘にもかかわらず、『知慧論』が『エッセ』テキストの書き

直し (rewriting) を行っていることは紛れもない事実である。そのことは、それ程モンテーニュとの交際をしていない者にでも断言できる。例を挙げよう。第一巻34章は、人間を動物と比較する。その意義と困難を指摘 (p. 207) した後でシャロンはまず、両者に共通のものについて語る。即ち、1 裸の状態、2 産着でくるむことの不必要、3 泣くこと、4 武器、5 食¹¹⁾ について人と獣との共通性を説く。ところで、これらの論点はそっくりそのまま『エッセ』テキストの踏襲である。《レモン・スボン弁護》においては、最後二つの順序を別にすれば、素材の配列が同じであるのみならず、それぞれにおける文章がまたかなり厳密な対応を示すのである¹²⁾。《弁護》が最後の4を改行しているのに対して、『知慧論』は1から5まで全く改行はしない。けれども例の余白の《sommaire》で以って明確に論点を画していく。つまりシャロンは『エッセ』テキストを整理し分節しているのである。

それから6として言語活動の件が来る。この箇所25行を《弁護》の有名なテキストと比較しよう。まずその冒頭：

De la Sagesse, op. cit., p. 209,

Quant au parler, *l'on peut bien dire*, que s'il n'est *point* naturel, il n'est *point* nécessaire : *mais il est commun à l'homme avec tous animaux*. Qu'est-ce autre chose que parler, cette faculté que nous leur voyons de se plaindre, se rejouir, s'entr'appeler au secours, se convier à l'amour.¹³⁾

Essais, op. cit., p.181,

Quant au parler, *il est certain* que, s'il n'est *pas* naturel, il n'est *pas* nécessaire. *Toutefois, je crois qu'un enfant qu'on auroit nourri en pleine solitude, esloigné de tout commerce (qui seroit un essay mal aisé à faire), auroit quelque espece de parole pour exprimer ses conceptions ; et n'est pas croyable que nature nous ait refusé ce moyen qu'elle a donné à plusieurs autres animaux : car, qu'est ce autre chose que parler, cette faculté que nous leur voyons de se plaindre, de se resjouir, de s'entr'appeller au secours, se convier à l'amour, comme ils font par l'usage de leur voix?*

両テキストをざっと見比べて、『エッセ』テキストの約3分の1がそのまま『知慧論』で復原されていることがわかる。逆に後者の文章のうち3分の1だけがシャロンの筆になるのである。けれどもそれすらもが如何にして作られたかを吟味するなら、前者から後者への言説の流入は驚くべき事態であることが判明するであろう：

1°. 『エッセ』の《il est certain...》(…は確実である) は《l'on peut bien dire...》(…と言える) に変わり、二度出現する否定辞《pas》はいずれも《point》に変更される。以上はいずれも個人的好みや流行の相違にすぎまい。

2°. 『エッセ』の《Toutefois, je crois》に始まる複文はその前の文、ことばが《自然

的 (=生れつき) でなかったら必然 (必要) でもない¹⁴⁾ を否定する仮想事例を提出し、あらゆる人的交流から隔離された子供¹⁵⁾の言語がどんなものかという考察に導いていくのだが、これはシャロンによってあっさり削除される。剪定である。

3°. 同じく《et n'est pas croyable...》に始まる複文：《自然的に他の幾多の動物に与えられたこの手段が我々には与えられていないとは信じられない》は、《それ(ことば) は人間とあらゆる動物とに共通である》に変わる。《幾多の》の《あらゆる》への変更と共に、否定の否定という廻りくどくかつ人間的な議論が断定かつ同時に *ad rem* (事物的) な議論となる。要するに単純化である。

4°. 《cette faculté...de se plaindre, de se resjouyr...》(嘆いたり喜こんだり…する能力) の二つ目以下の *de* の省略は、文体を軽くする配慮に他ならない。『エッセ』とて4つ目のパラダイグム《恋へと誘い合う》ではこれを落している。

5°. 最後に、《実際、動物達がその声を用いてそうしているように》の省略は、文脈からして暗黙に了解できることの切断である。これまた文体をすっきりさせる作業である。

以上ほぼ全ての修正において、『エッセ』の文章を簡潔にする方針が実行されていることは明らかである。2の削除を別にすれば、他は全て同一テキストの複数写本間の異文にも匹敵する程度の変更であり、それに既に見た論点配列の順序における踏襲や頻繁に現れる原テキストそのままの引用の事実は、まさに驚異的な現象である。要するに、ここに純粋に《手づくり》のテキストは一字とてないのである。

続く部分を調べる前に、ここでテキストの思想内容について註釈しておこう。というのは、『エッセ』に倣って上の如き逆説を展開するシャロンも、言葉が他ならぬ人間に特別に (*peculièrement*) 与えられていることを白状せざるを得ないのである。《見る・聞く・話す》(I. 11) の一節：

ことばは、優れた極く必要な賜物として特別に人間に与えられている。それが出ていく人にとっては靈魂の似姿、靈魂の指標にして鏡¹⁶⁾、心の使者、内にある全てが外に出てきて見られる戸… (p. 116),

それを受けとる者にとっては、力強い主人、威厳ある摂政で、要塞の中に入り、そこで頭を捕えゆさぶり活気づけ昂らせなだめいら立たせ悲しませ喜ばせ、望みのままに情念をふきこみ、聴く者の魂をいじくりこねまわし… (p. 117).

迂言法、隠喩の展開、同義語の羅列に注目しよう。話者、聴き手に続いて、分析的な言説は《皆にとつては》という論点を設けて、同じように修辞を駆使した文章を織り成していく。更には問題の人間と動物の比較の章においてすら、両者の相

違を語る時、作者は人間の優越の一つとして《援助や救助を求めたり提供したりするための言葉》(p. 210)を挙げてしまう。まるでそれが、『エッセ』からの援用で、動物においても認めた《s'entr'appler au secours》(p. 209)とは別のものであるかの如く。

さて主題に戻り、逆説の続きの部分の生成を調べよう。今度は著者は、『エッセ』の数ページ前の箇所—3ページ(初版では1ページ余り)のテキスト—から適宜に抜きとり順序を入れ換えて彼の文章を書く。以下にシャロンの文章を復原し、その下敷となったモンテーニュの文章を抜粋する。(全く同一の部分は斜字体に変える)。

Charron, *Ibid.*:

Et comme nous parlons, par gestes et mouvement des yeux, de la teste, des mains, des espauls (en quoy se font sçavans les muets) aussi font les bestes, comme nous voyons en celles, qui n'ont pas de voix, lesquelles toutesfois s'entrefont des offices mutuels: et comme à certaine mesure les bestes nous entendent, aussi nous les entendons. Elles nous flattent, nous menacent, nous requierent, et nous elles. Nous parlons à elles, et elles à nous, et si nous ne nous entre entendons parfaitement, à qui tient-il? à elles ou à nous? c'est à deviner. Elles nous peuvent bien estimer bestes par cette raison, comme nous elles: mais encore nous reprochent elles, que nous ne nous entre entendons pas nous mesmes. Nous n'entendons pas les Basques, les Bretons, et elles s'entre entendent bien toutes, non seulement de mesme espece, mais, qui plus est, de diverse: en certain abbayer du chien, le cheval cognoit qu'il y a de la cholere; et en autre voix il cognoit qu'il n'y en a point¹⁷⁾.

1° (第2行—3行)については、《Aux bestes mesmes qui n'ont pas de voix, par la société d'offices que nous voyons entre elles》(p.174 [I], 1.3—4)¹⁸⁾.

2° (1.3—5):《Nous avons quelque moyenne intelligence de leur sens: aussi ont les bestes du nostre, environ à mesme mesure. Elles nous flatent, nous menassent et nous requierent; et nous, elles》(p.173, [I], 1.20—23).

3° (1.5—6):《Ce defaut qui empesche la communication d'entre elles et nous, pourquoy n'est—il aussi bien à nous qu'à elles? C'est à deviner à qui est la faute de ne nous entendre point》(p.173, [I], 1.6—9).

4° (1.6—7):《Par cette mesme raison, elles nous peuvent estimer bestes, comme nous les en estimons》(p.174, [I], 1.10—11) 3°と4°の間で『エッセ』の1行 [I]が落ちる。

5° (1.8—9):《(aussi ne faisons [= entendons] nous les Basques et les Troglodites)》(p. 173, [I], 1.13—14). 4°と5°の間でも1行余り [I]が落ちる。

6° (1.9—10):《nous decouvrons bien evidemment que entre elles il y a une pleine

et entiere communication et qu'elles s'entr'entendent, non seulement celles de mesme espece, mais aussi d'especes diverses》(p. 173, [I], 1.24-27). 5°から6°の間に2°が位置するが, 5°-2°では6行余り〔I, II, I〕が脱落。2°-6°では《Au demeurant》(ついでに)なる語句〔I〕が。

7° (1.10-11) : 《En certain abbayer du chien le cheval cognoist qu'il y a de la colere ; de certaine autre sienne voix il ne s'effraye point》(p.174, [I], 1.1-3). 6°から7°にかけてはルクレティウスの3行〔II〕が脱落。

シャロンが利用している『エッセ』の文章は全て初版の文章であり, それはそれぞれの間に0行ないし6行の削除を伴って3°-4°-5°-2°-6°-7°-1°の順に置かれていたのである。シャロンは『エッセ』の概要 (analyse) をつくり, 時に云い換えをし, その配列を変えて結合することによって自分のテキストとしているのである。未だ由緒が不明の『知慧論』のテキストたるや僅かであり, それも要約として¹⁹⁾, 又は更に別の箇所からの流用として²⁰⁾説明できそうであるし, 更に残る語句があるとしても, それはせいぜい著者が作りつつある文脈からの容易な敷衍ないし複数の引用を繋ぐ操作として説明されよう。

このような事例を前にした時, 作品のどこにも『エッセ』やその著者への如何なる言及もないという事実は全く不可解なものとなる。17世紀前半において話題になり始める文学批評の上での一つの関心は, この時期には大して重要ではなかったのであろう²¹⁾。現代の読者なら躊躇わずこれを剽窃と呼ぶであろう。しかも, いま検討した件は特に甚だしい例だとしても, 類似の操作が作品の処々でなされているとしたら?

筆者が気付いた他の一二の例を挙げて, シャロンによる『エッセ』の利用の仕方をもっとよく考察しよう。1°, 『知慧論』Iの5《身体の財・健康・美その他》の第二文段《美》(p. 67-68)は, これは《人々が互いに和合しあう第一の手段である》という文章をはじめとして『エッセ』II-17《傲慢について》からの技き書き(II, II, p. 58-59 [I])を含んでいるし, 続く文段《美の男女差》は同じく『エッセ』の続き(p. 60 [I])から引用している。『エッセ』の語り手が披露する古人の意見や逸話は減少し, 特に《私》に関する記述が完全に消滅することに注目しよう。2°, 第一巻49章《国家・主権・主権者》における王侯の身分の不都合の4番目《名譽の験し》のパラグラフ (p. 325) は『エッセ』III-7の《君主の不都合》の指摘:

我々が, 身体や精神の行使において, 名譽や力量に執着するがために互に行なう験し合以上面白いものはもしかしたら何もないのだが, 君主はその威信の故にこれに本当に参与することは決してできない (III, I, p. 193[II])

及びこれに始まる数ページからの抜き書きと要約である。それに直結する気儘な旅ができない不便に関する記述 (p. 326) は『エッセ』の別の箇所《我々の間にある不平等》(I-42) のこれまた抜粋 (I, II, p. 172sq [I]) を以ってテキストを作る。ここに見られる書き直しには、上述の削除—それは個人にかかわる言説の一般的論理への純粋化を示す—と共に、先行作品のエコノミーを脱構築して論旨を組み換えるという特徴を見せている。

一口に復原とはいえ、その内訳は抜粋 (つまり削除)、圧縮、修正、配置換え…を複合するものなのである。その場合、シャロンは『エッセ』初版のテキストから引用することが非常に多いという事実 (二つの例外：p. 183の引用及び註20参照) が興味深い。モンテーニュにおける書き加えの意義がこの読者には理解できなかったのか。より正しくは、この読者たる書き手の築くテキストの性格が『エッセ』の追加行為の性格とはむしろ相反するものであったということであろう。一方が追加によって具体化をめざせば、他方は削除によって一般性に向う。彫刻の仕事が《粘土をこね、さわることによってそれに一つの形を与えること》と、一塊の物材にとり組み《この塊から一つの形を解き放つ》²²⁾ ことの二つの面をもつとすれば、『エッセ』のエクリテュールは前者に、『知慧論』のそれは後者に似たものであったといえよう。唯、モンテーニュは粘土のみを用いたのではない。従ってシャロンが取り組んだのは、様々のマティエールから成るいわば定かならぬ形をした巨大な塊であった。

ともあれ、以上の調査から、『知慧論』に対する『エッセ』のインパクトは決定的であることを断定することができる。現代におけるシャロン評価の支配的傾向はこの事実由来するかと思われる。この作家に独創性はない。従って才能はない。実際、様々の情状を酌量してとはいえ、また比較による議論とはいえ (しかしテキストの研究は比較によって終るものか?)、ついには次のような判決が下されてしまう：

モンテーニュとパスカルという二つの驚異的な文体に挟まれたシャロンの落度とは、彼がほとんど物を書けなかったということである (le tort de Charron est d'avoir à peine su écrire) ²³⁾.

考え方によってはしかしいささか安易な—というのは我々はロマン主義以来の天才信仰あるいは独創性神話の内に依然としてあり、それにまた比較は、思想内容のそれにすぎないかせいぜい文体のレヴェルでのそれである—このように厳しい批評を前にして、それにそもそも文の学にとって重要なのは作品の文学性であって価値ではないのだが、ここでシャロンをモンテーニュとであれパスカルと

であれ、組織的に交叉させる労をとることはできない筆者としては、とりあえず二三の印象を書きつけるより他はない。まず『知慧論』のフランス語が全体として『エッセ』のそれに比べてずっと《新しい》即ちより古典的であるという特徴をもつこと、またその文章には朗読に適したきびきびした律動性があるという事実（その一要因は次章で検討する）、更には、先に一例を見たことで（p. 181 参照）ここでは満足せざるを得ないが（但しその一面は次章で見る）、他の文彩と合せて用いられることもあり、ユーモアにも事欠かない隠喩技法の面白さ（これは『エッセ』の特徴でもある）²⁴⁾も指摘することができる。

§2 シャロンのエクリテュール

しかし、モンテーニュからシャロンにかけての変化は、文体（能記）における連続性と差異、また技法の考察、更にはいうに及ばずイデオロギー（所記）の上での異同の確認では不十分である。両者の間には、これらの現象の根底にある書く行為そのものを前にした（或いはその中にある）二つの理念の対抗関係があったのではないか。もしくは生き方としての書き方の相違が。『知慧論』を一つの奇書とする全く典拠を明記することのない頻繁な『エッセ』テキストの再処理を前にする時、比較にならぬほど重要な材料の提供者であり、部分的には材料配列に関する忠告者ですらある人を名指すことなく作者が、

私はあちこちに探索して、この作品の大部分の材料を、人間の真の学であるこの倫理、政治学の問題を扱った近代の、そしてこの学における偉大な博士セネカとプルタルコスら古代の作家達から引き出した（初版《序文》, p. 33）

と打明ける時、我々には剽窃という後めたい行為ではなく、むしろ何か異質のものが彼にあるのではないかという気がしてくる。彼はあたかも自らその師に成りかわったかの如く、もしくは荒削りのままに留ったディレクターを、真面目な教授、説教家、哲学者に研きあげるという使命を当然のこととして任じられたかの如く、堂々と書き直すのである。これこそ《自分のもの》と宣言する《形式と秩序》に従って（p. 34）²⁵⁾。換言すれば、著者が披瀝する身辺雑話から体験談、古典テキストの探索・収集（cf.《Dn pedantisme》, I, I, p. 190-191）、またそれらを基にした感想やお喋り、又は論理や逆説の追究、表現の探求、そして何よりこれら全てを通じて、変りつつある自己を生けることばによって、即ち訂正ではなく加筆によってそのままに括写する試み²⁶⁾、そこから『エッセ』の多様性や具体性は生れ、そしてそれがこの断固として反体系的な作品言説のもつ類稀な魅力となっている

る。ところがシャロンは、この豊かな、しかし見方をかえれば玉石混淆のテキストを原料としてそこに一種の純化と体系化の作業を施すのである²⁷⁾。

『知慧論』の鬱陶しさを不快とした同じ断片においてパスカルが《le sot projet》(愚かな企て)と嘲笑したモンテーニュの自己描写は²⁸⁾、体験談や身辺雑話一名称成立以前の自伝言説としての作品の側面一と共に完全に払拭される。《私》(Je)は現れるけれども、既に見た唯一の例(p.179参照)を除けば、それは書記行為の対象をではなく、書記主体ないしはせいぜい作者を指している。生活者はエクリテールに隠蔽されるのである。古典の引用については大した変化はないと見えるかもしれない。が注意して読めば、ギリシャ語テキストの引用というペダンティズムはシャロンではほとんど影をひそめる²⁹⁾。モンテーニュが弁解の括弧を付けざるを得なかったラテン語の引用は³⁰⁾、シャロンでもまだかなり現れる。けれどもそれは短いものが多く、遂には格言となる³¹⁾(当時の学術書や宗教書、学院や教会での習慣の反映? 学問・宗教用語はまだラテン語であることを忘れまい)。そこでは、数多く用いられる(フランス語の)諺においてと同じく³²⁾、出典も著者もない。これらの変化は書記行為における没個性とか普遍性への指向の現れであったとすることができる。作品が《17世紀初頭の知識人の趣味にその師よりむしろ上まわって受けいれられた》³³⁾という事実は、いわゆる文学・哲学史上の意義をもつ前に、エクリテールの歴史にとっての意義をもつだろう。このような類の本が、幸いにも『エッセ』の影響の下に、フランス語で書かれ得たのである。それはニコルやボスユエ、そしてラ・ロシュフコーの文への道であった。

『知慧論』はもはや特定の人(よしんば彼が自ら《人間》の一範例たることを主張するとしても)の判断力や言語のためしではない。これはその鬱蒼とした構成と相俟って、真面目な一別の意味でのペダンティズム——一般的で推論的な(général et raisonné)一つの倫理学の書、または倫理学を核とした総合的な人間学の書(traité)である。それはあたかも、無秩序から秩序、ルネッサンスから古典哲学、動から静、そしてもしかしたら未完の生から完成した死へ向かう知とその言語の変貌の鎖の一輪であった。

以上筆者は、『エッセ』とのテキスト間関係性の観点から『知慧論』テキストの原料とその生成のプロセスを考察した。ではそこで産出された作品はどのようなディスクールを織り上げるのか。先に立てた第二の問の吟味に入ろう。

第二章 ディスクール—哲学と神学—

Mihi quisquam non videtur, cum aliquid nescire se scit,
sed cum se putat scire quod nescit (Saint Augustin).

§1 知性の誤謬/原罪のイメージ

トゥルナン《断固としてキリスト教的な枠》という表現が筆者をひきとめたことは先に述べた。文学史家は続いて書く：《作品の至る所で彼は人間の不幸の第一にして唯一の原因とは自己を知り損うことである、と宣言する》(op. cit., p.12). そこに見るテキストの引用と氏のコメントは次の通り：

シャロン：人間にとってもっと本性的で内的な別の欠陥がある。というのはそれは彼から彼の内に生れるのである。その中でも最大で根ともなるのは傲慢であり自惚（世に最初にして原初的な過ち、あらゆる精神のベスト、あらゆる不幸の原因）である。そのせいで人は自己に満足し、他者に譲ろうとせず、他人の意見を侮り、自分の意見に安住する（…）神が人に与えた最も見事で幸せをもたらす分配物とは判断力であるといわれる。というのは各人が自分の判断力に満足しそれを十分に持っていると考えているからである¹⁾。ところでこの病気は自己をありのままに認めないこと（mescognoissance）に由来する。我々は自分の精神の虚弱さを決して十分に感じはしない。かくして精神の最大の病とは（…）自己自身の無知（ignorance）である（op. cit., I, 14 《De l'esprit humain, ses parties...》, p. 144）²⁾。

トゥルナン：作品中、多くの件が同じ考えを表現している。常に傲慢、自惚、《人間の破滅にして知恵にとっての不倶戴天の敵、魂の真の壊疽にして腐敗である自分自身への狂愛》への参照がみられる。けれどもこの欠陥は、決して最初のもの（première）ではなく常に一つの根に結びつけられる。だがそれは神の呪でも原罪でもなく、心の悪さでもない。単に知性（esprit）の誤謬、即ち自己の認識し損いなのである（op. cit., p. 13）³⁾。

しかしどうなのか。解説は自己認識の重要性という一点を強調する余り、まずテキストの上でこの主題と絡み合った文字上の意味、そして慣用的な一連のイメージ、更に作品の巨大文脈を軽視する結果になってはいないか。まず巨大文脈から見れば、シャロンはその《序文》において知恵を三つの段階に識別する：神的/人間的/世間的知恵である。そして各々は《神 (Dieu), 純粹にして全き本性 (Nature pure et entiere), 汚れ腐った本性 (la nature vitiée et corrompue) に対応する》(p. 27) という。ところでこの第三段階には、17世紀神学の一大参照事項となるヨハネのいわゆる三つの邪欲（concupiscentia oculorum, concupiscentia carnis, superbia vitae）⁴⁾が位置し、これら三つは又ヤコブの与える三つの概念に結合される。即ち、terrena, animalis, diabolica である⁵⁾。そして原罪の教義と悪魔のそれが連

帯することはいうまでもない⁶⁾。そこまでの連鎖を殊更にうち立てなくとも、最下位の知恵が原罪の結果であることは明白ではないか。原罪記述の言語表現において、《本性の腐敗》とか《腐敗せる本性》というのはトポスなのであるから。

第二に、同じく常套表現が問題であるが、《病氣》は罪の文彩として特権的な位置を占めること、これまた17世紀（そして20世紀でも）⁷⁾の常識であろう。そして上記テキストにもペスト、病、最大の病が、また文学史家のコメント中の引用にも（ペスト）、壊疽（gangrene）の隠喩が轟めいている。パスカルについてル・ゲルン教授が指摘した病のイメージのあり方：

しかしこの語が一番よく用いられているのは《愛徳の秩序》においてである。それは罪を、最も一般的には原罪以後の人間本性の失寵（déchéance）状態を意味する…そして霊的な病はジャンセニウスが…分析するあの三つの邪欲に帰着する⁸⁾

という事態は、ジャンセニズム体験のないシャロンについても既に全く変わらないと見てよい。因に、シャロンより25年程若いフランソワ・ド・サル（1567-1622）においても、罪を意味する病氣、神や告解師を意味する医師のイメージは多いという⁹⁾。

実際、『パンセ』の一行は、シャロンのテキストを半ば要約する。括喩法（prosopepée）によって作品内の（従って虚構の）読者に語りかける神の知恵：

汝等の最大の病とは汝等を神からひき離す傲慢と汝等を地上に繋ぎとめる邪欲である（182 [p.108] -149）。

ヨハネの二つの邪欲はここで一つに統合され（数行後には複数の邪欲も現れる）、《superbia》は《orgueil》に（数行先には《superbe》とも）翻訳されている。地上（terre）はヤコブの《terrena》を淵源とすることは明らかだし、邪欲は《animaux 動物》の分け前（ヤコブの与える形容詞参照）とも規定されている¹⁰⁾。これがシャロンを半ばしか要約しないという理由は、ここで傲慢が即自己認識の欠陥に関連づけられないという点にある。

第三に、シャロンは、傲慢と自惚について《世に最初にして原初的な過ち》（premiere et originelle faute du monde）なる説明を加えている。ところでこの《原初的な過ち》が一体原罪とは別のものを意味し得るのか。それを本人が《最初の》と呼んでいるのに、《決して最初のものではない》などと、テキストの文字を否認することですむ筈はあるまい。

但し疑問は残る。シャロンはこの欠陥の根源とは自己に関する無知であるとも言っているのである。テキストにおける病の隠喩は三通りになっている：

1° 傲慢・自惚についてこれを《あらゆる精神のペスト》つまり病と規定。

2° 《この病は自己をありのままに認めないこと (mescognoissance de soy) から来る》。ここで病とは各人の自分の判断力に関する満足、即ち傲慢である。従って傲慢は自己の無知に由来する。

3° 《精神の最大の病とは自己自身の無知である》。

傲慢をO, 病をM, 自己の無知をIとせよ。

三ヶ條はこう表現される：

1° : O=M, 2° : M←I, そしてO←I (矢印は由来の方向を示す), 3° : M=I. そして, 《philautie》 (<philós, áutoú) を語るもう一つのテキスト (cf. n. 3) は続いて,

この傲慢, 自己への狂愛 (folle amour) は, 自己, その虚弱さ, つまらなさ, 一般的には人間の無力と悲惨, 特殊的には自己に固有の個人的なそれを認めないことからくる (p. 383) と規定する。即ちそこではO←Iで, 2°に一致する。

そこで, まず2°と3°のMとIの関係は曖昧であり, 3°を1°に代入して得られるO=Iは2°で得られたO←Iにこれまた撞着することがわかる。冗舌な著作にままた見られることだが (cf. p. 181-182), これらのテキストに概念の規則正しい網の目を見ることは困難であるかと思われる。

問題の本格的な解明に入る前に, 小休止をおいて, この《自己への狂愛》(p. 503も見よ)の弾効にもかかわらず, トゥルナン氏が指摘するように, シャロンが, 少なくとも第一巻において, 自己認識の必要を強調して已まないという事実を確認しておこう。その最も詳細な説明は次の件である：

自己認識は…真実の長い弛まない自己研究によって得られる。単に言葉や行為のだけでなく, もっと密かな思い (その生れから進展, 持続, 反復) や自分の内で蠢めくもの全て, 夜の夢に至るまでの真面目で注意ぶかい吟味によって。近くからこっそり窺い, 頻繁にいつでも自分に探りを入れ, 押し, 痛いほどつねることによって (p. 49)。

この教訓には恐らく, シャロンが信者として実践し, 司祭として人々に執行してもきた悔悛の秘蹟における沈思糾明の経験が資するところ大であろう。ともあれ, 自己認識の観念が, 他方著者が標榜する無知の知 (hoc unum scio quod nil scio) の原理 (p. 400) に整合するのかどうかは今は問わないにしても, このように潜在意識にまで及ぶ執拗な自己探索が, ナルシシズムから発せずして, 或いはこれを密かに満足させずして—おお神よ, 我を我より護り絵え! (p. 383)—, 要するに《自己への狂愛》なくして可能なかと近代人なら (或いは既にジャンセニズムに毒された者なら) 問うでもあろう¹¹⁾。少なくとも作者はこれを単純に肯定する。そしてそこに彼のいう人間的にして最高の知恵は存するのである。

先の議論に戻る。ここで, 傲慢を原初的な過ちと規定するテキストが括弧に

入っている事実注目しよう。これはどういうことなのか。しかしそもそも括弧とは何なのか。

§2 括弧の機能

迂回になるが、余り人が問うことをしないらしいいわゆる《自明の》問題を考える。この書記法上の手続、従って修辞学用語を定義して、デュ・マルセは構文にかかわる文彩として位置づけ、こう書いている：

括弧もまた一種の語順転置 (hyperbate) を起すものと考えられる。なぜならそれは独自の意味であり、別の意味の中に挿入されてその連続を中断させるのだから¹²⁾。

ところでこの独自の意味 (un sens à part) のあり方¹³⁾、より正確には別の意味連鎖の中にそれが侵入する仕方、つまりこの独自の意味と文脈との関係を問わねばならないのである。

『知慧論』においても、括弧が情報を隔離しつつ補足する機能を有する点では変りはないが、恣意的になることを恐れず整理すれば、これは3(4)つに分類される。1、名の定義ないし文脈の限定、2、メタテキスト、3、補遺、そして(4)、特殊的にキリスト教(神学)的な言説の処理、である。以下説明する(なおここでの調査は、ほぼ p. 200から p. 400に限定する)。

1. 名の定義・文脈の限定

パスカルやポール・ロワイヤル『論理学』で周知の名の定義については説明は不要であろう。一例を挙げる：

民(筆者はここで俗衆、賤民、どん底の人々、如何なる覆いのもとにあろうとも低い隷属した、手仕事に携わる身分の人々を意味する)は、幾つもの頭をもつ奇怪な動物である¹⁴⁾。

《万人が…》と言ったあと、《ここでも数少ない賢人を除く》(p. 417) といって用語の外延を限定する例もある。更に、記述事項から派生し得うる別の問題の可能性を示唆し、直ちにこれを斥けて論旨の連続性を維持する例 (p. 409) もここに入れよう。これは修辞学の《préterition》(暗示的看過法)¹⁵⁾に隣接する。

2. メタテキスト

これは言説を予告したり、逆に再説したりする時に現れる。既に書いたという事実 (fait) や、それがいかなる機会であったかを示すことも、既に述べた事柄 (chose) の要約である場合もある。《transition》も、出典指示の註釈もこの部類

に入る¹⁶⁾。既出の機会及び言説内容の双方を思い出させる例の一つ引く：

人間の悲慘の第二の要点にして証拠は、快樂を、如何に小さく取るに足りないものであれ
切除し（というのは、人間の虚弱さにおいて言われたように、人は大きく全き純粹の快樂は
享受することはできないのである）、その数や甘さを減らすことに存する（p. 254）。

この註釈において、虚弱さは章のタイトル（I, 37 《Foiblesse》）に送り返す。今日
ならば鉤括弧がつくところであろう。多数の例がある¹⁷⁾。

3. 補遺

以上がメタ言語（言説）であるのに対して、補遺機能をもつ以下の類はむしろ
端的に言語（言説）に属する傾向をもつ。幾つかの内部区分が必要になる。

a) 自明の理

無常な人生の中で、人々は絶対に死にたくないか、でなければ不平をこぼす。
けれども、

賢者たるもの、それが自分の意向とは無関係になされた契約であることを知って（とい
うのは、人は望む時に望む工合に生きもしなければ死にもしない）…何とか順応し、至極く穏
やかに身を処していく（p. 222）。

括弧内テキストは、経験あるいは本質直観に基づく自明の、従って言う必要もな
い理であろう¹⁸⁾。文脈との関係ではこれは後に挙げる理由の説明の類に入れても
よい。なおこれはストア的傾向を示すテキストである。論理的推論によって文脈
そのものから来る自明の理もある。名誉（honneur）とは《立派な行為の外部へ
の輝き》であるとして、シャロンは括弧を設ける：

（なぜならば、事柄が内部でそれ自体においてどんな価値・美点・完成をもとうとも、も
しそれが何ら優れたものを産出するのでなければ、それは全く名誉を受け得ず無かったも同
然である）（p. 363）。

これまた理由の説明とも見えるが、実際にはこの総合文（période）は定義命題
そのものの分折と変形から生れる。即ち、名誉とは輝き出る美しい行為である。
もし輝き出ないならばそれは名誉ではない、と言うことに他ならない。このトト
ロジー（また定義を構成する種差の否定による種の否定であるともいえる）は新
たな情報を与えるわけではない。

b) 別の観点からのコメント

記述内容の説得のために共通の経験に訴え（p. 369）、説得とは関係なく考古
学的事実を挙げる（p. 394、初版）挿入文がある。記述自体に関する評価の言は

もっと多い。まず構成しつつある言説に対する鑑定と予告のメタテキストの例を引こう。人間の不平等を語る一節は、容貌の多様性を指摘した後で、

魂にはもっと大きな相違がある。人と人との間には獣と獣との間よりは比較にならぬ大きな相違があるのみならず（更に競りあげることになるが）、人と人との間には人と獣との間よりも更に大きな相違があるからである（I, 41, p. 282）

という。この哲学史上に有名な逆説の表現において¹⁹⁾、括弧は環境文脈への修辭的評価を行っている。逆に議論について《穩かに云えば…》なる断り書も存在する（p. 411）。議論の内容（所記）にかかわる価値の評価もある。情念に対して打つべき手の一つ、要心についてシャロンは、《（最良のものではないが）良きもの》であると言う（p. 381）。これは情念につける葉の間の比較という観点からの註釈である。最後に、賢者はその愛着を少数の正しいものみに与えるべきだという勧告において、《實際、正しいものは…数少ない》なる価値判断が挿入される（p. 411）²⁰⁾。

c) 理由の説明

記述内容への理由の追加で、以上見たもののうち形式的には《というのは》(car)で始まるものは全てここに入る。そうでない例を一つ見よう。知恵の基礎としての廉直、又は善良²¹⁾についてのテキスト：

善良さは、知恵の第一の主要な基本的な部分である。というのは万人が（まことに本気でであれ、反対を唱えるのを恥じたり恐れしたりして見せかけによってであれ）それを大歓迎する（p. 417）。

これは心理的モチーフを挙げての理由づけである。他にも例はある²²⁾。

d) 類比

文脈で語られる主題とは別の領域に同様の論理（analogie）があることを書き加える括弧である。情念の処理法の一つは、《一つの情念をもっと強力な別の情念によって押し殺すこと》にある、とする、

というのは諸々の情念は決して互いにバランスをとっているわけではない。常にどれか一つが（丁度、体液の場合のように）優勢を占め、他を牛耳り抑制している（p. 381）。

この隔離された比較（comme...）は他の現象にみられる類比を追加情報として喚起する。修辭学のいわゆる直喩の括弧（p. 430）もここに含めることができる。

以上の目録は云うまでもなく完結したものではない²³⁾。例文には事欠かないし、新たなカテゴリーを設けることも必要になろう。それに、以上の事例もそれらを

分類する項目も、考えてみれば、17世紀であれ現代であれ、大同小異、他の文献でも再発見されるものであろう。けれども、一般的であるというまさにその理由によって、この現象はいかに些細で自明に見えようとも、書記行為における切断と連続、即ち分節の問題として、句読法²⁴⁾や接続詞の使用（《等位》と呼ばれる *et* がどれだけの意味をもつか！）等と共に、文（ふみ、あや）の学が取りあげてみる必要があると筆者には思われる。

今はしかし、このような展望の下に、シャロンのディスクールにおける哲学と宗教との断絶や連合の様態を考えることが我々の課題である。補遺のグループに属するものとして、特殊的に宗教や信仰に関する議論、つまり神学の言説がある。これを次に吟味しなければならない。

（続く）

註 釈

第 一 章

1. Pierre Charron (1541-1603). 1589年の *Discours Chrestien* には、パリ人にして Condom 教会の聖歌隊員、(神学を教え説教をする) 参事会員 (chanoine theologal) という肩書を記載している。 *De la Sagesse*, Coll. Corpus des Œuvres de Philosophie en langue française, p.872 (Fayard, 1986) 参照。
2. 出版年代は B. de Negroni のノート (*op. cit.*, p. 4) による。以下参照はこの版により、明記しない限り第二版のテキストを用いる。
3. 『パンセ』への参照はセリエ版: *Pensées*, éd. Ph. Sellier (Mercure de France, 1976) 及びラフュマ版: *Pensées sur la Religion et sur quelques autres sujets*, éd. L. Lafuma, 3 vols (Ed. du Luxembourg, 1952); *Pensées in Œuvres Complètes de Pascal* (Seuil, 1963) の二重併記を用いる。S-Lの順である。
4. 以上、《Table des Chapitres...》, p. 12-23参照。
5. J.-Cl. Tournand, *Introduction à la vie littéraire au XVII^e siècle* (Bordas, 1970, nouvelle éd., 1984)。
6. 著者はこれが1606年公刊という (p.12)。第二版以後のいずれかの版との混乱か。
7. 荒木昭太郎、《モンテーニュとシャロン》、『フランス文学講座』, 5《思想》, p. 158 (大修館, 1977)。
8. Pascal, *Entretien avec M. de Saci*, in *O. C.*, *op. cit.*, p. 293 b. Cf. Montaigne, *Essais*, II, 12, in *Œuvres Complètes*, éd. J. Plattard, II, I, p. 286 (Les Belles Lettres, 1976)。以下『エッセ』の参照はこの版による。
9. *Essais*, *Ibid.* モンテーニュが、平衡をとった天秤と銘句をメダルに打たせたのは1576年のことである。Plattard, 《Notes》, p. 433 参照。

10. モンテーニュの《Que sçay-je?》から《その弟子、極端なシャロンは《Je ne sçay》を作った》(R. Pintard, *Le Libertinage érudit dans la première moitié du XVIII^e siècle* (1943), p. 46, Slatkine, 1983).
11. *Op. cit.*, p. 208–209. 数字は余白に記載されたメタテキスト。
12. *Essais, op. cit.*, p.178–180. なおここは初版(1580年)以来のテキストである。
13. 和訳：《ことばについては、それが自然的でないならば必然的でもないといえる。けれどもそれは人間とあらゆる動物とに共通である。動物にみられる嘆いたり喜んだり助けを求め合ったり恋へと誘い合う能力、これが話すことでなければ何であるのか》。両テキストにおいて斜字体は互いに異なる部分を示す。
14. このぶっきら棒な文章は、後に、言語は自然的でない故に必要でもないとするルソーによってモンテーニュとは反対の意味をもつ一大パラドックスとして展開される。*Discours sur l'inégalité* (1755), *Œuvres Complètes de J.-J. Rousseau*, III, p.146–151 (Gallimard, 1964) 参照。
15. この仮想実験のルソーへの反響については、*op. cit.*, p.123–124を見よ。なおマリヴォも *La Dispute* (1744) なる一幕20景の劇作品で同じ着想を出発点に据えている。そこに『エッセ』への言及はないが、18世紀における同様の思想についてはルソーへのスタロピンスキーの註釈、*op. cit.*, p.1295–1296参照。
16. 原文ラテン語：《animi index et speculum》。
17. 和訳：《我々が身振りや、目、頭、手、肩を動かして話す（その点では啞は物知りである）ように、声をもたない獣がそうすることを我々は見ている。しかしそういう獣達は互いに務めを果し合う。そして獣達がある程度までに我々を理解するように我々も彼等を理解する。彼等は我々の機嫌をとり脅し我々に懇願し、我々も彼等に対して同じことをする。我々が彼等に話しかければ、彼等は我々に話しかける。そしてもし双方が完全に理解し合わないとしたら、それは誰のせいなのか。彼等か我々か。言いあてなくてはなるまい。こうして我々が彼等を愚かかと思っているように、彼等も我々をそう思っているかもしれない。更に彼等は我々人間が相互に理解し合わないといつて我々を非難している。我々にはバスク人やブルターニュ人のことばがわからないのに、彼等はみんな、同じ種の場合でもまして異種間でも理解し合うのだから。犬の一定の吠え方で、馬は犬が怒っていることを知るし、別の声の場合には怒っていないと知るのだ。これで6《ことば》が終り、テキストは7《相互理解》の項目に移る。
18. [I]は初版以来のテキストを示す。[II]は第二版(1588)での追加、[III]は第二版への書き込みでシャロンには関係がない。
19. 冒頭の目、頭、手、肩による話し方は『エッセ』における動詞の羅列を削った縮約であろう (p. 174–175 [I, III]). 『エッセ』の挙げる眉のみがシャロンで落ちている。また啞への言及 (l. 2) は p.174 [I] の5行の要約であろう。
20. l. 5は《Comment ne parleroient elles entr'elles ? elles parlent bien à nous, et nous à elles》(*op. cit.*, p. 181 [II]) の第二文における protase/apodose の変換か。
21. 逸早く『ル・シッド』を批判した仮名者(多分 J. Mairet) のパンフレット、*Le vrai Cid espagnol* 及びアカデミーの『意見書』(いずれも1637年) 参照。
22. J. Guitton, *Le Travail intellectuel* (1951), *Œuvres Complètes*, III 《Sagesse》, p. 207 (Desclée de Brouwer, 1971)。
23. J. Vier, *Histoire de la littérature française, XVI^e–XVIII^e siècles*, p. 143 (Ar. Colin, 1959)。

24. 荒木氏の指摘（上掲論文，p.155-156）による。
25. Cf. Pascal, *Pensées*, 575-696.
26. 最後の表現は，Cl. Blum, 《La peinture du moi et l'écriture inachevée—sur la pratique de l'addition dans les *Essais* de Montaigne》, *La Poétique*, N°53 (Seuil, février 1983), p. 67-71に負う。
27. 『ド・サシ氏との対話』（p. 179参照）におけるモンテーニュの倫理思想の要約は，同じ作業の更に驚異的な実現といえる。『エッセ』最大の章《レモン・スボン弁護》（II, I, p.151-403）は，数ページの純粹論理に整理される（Pascal, *op. cit.*, p. 293b-294b）。
28. パスカルに続く他のアウグスティヌス主義者（アルノオ，ニコル，マルブランシュ）の『エッセ』作者に対する主な非難も《ナルシスム》の徴候を標的としていることは周知の通り。
29. 800ページの作品中に数ヶ所の例はあるが，いずれも一語から数語の引用である（pp. 275, 432, 496, 535, 556, 583...）。
30. Cf. *Essais*, II-12（II, I, p. 206）。《弁護》の延々と続く様々の動物や古代人の逸話もまたは完全に削除される。哲学者達の意見も大幅に減少する。
31. p. 300-500の主な格言の例：pp. 306, 327, 338, 379, 388, 389, 400, 411, 413, 418, 421, 435, 469, 470, 485, 497, 499...
32. 同じく諺：pp. 319, 337, 347, 393, 438, 444, 462, 480, 481...
33. 荒木氏上掲論文，p. 159。またこの作品は《数十年間，もっとも多く読まれた道徳的著作の一つであった》（ボルケナウ著，水田他訳『封建の世界像から近代の世界像へ』（1934），I, p. 249, みすず書房，昭和34年）。

第二章

1. モンテーニュが既に人口に膾炙した文句として書きつけたこの命題は，ガラス神父（1623, esprit について），デカルト（1637, 1648, bon sens, sensus について）によって反復される（voir E. Gilson, 《Commentaire historique》 sur le *Discours de la Méthode*, p.83-84, Vrin, 1925, 4^e éd. 1966）。勿論シャロンを追加すべきである。なおポール・ロワイヤル『論理学』（1662）, (*La Logique*, 5^e éd., 1683, p. 4, Société des Publications de la Faculté des Lettres de Lille, 1964) 参照。
2. 二つの省略はトゥルナン氏による。なお氏はこれを I, 15と記載している。また綴字の近代化の他に 1°《l'on desdaigne ses avis》は《...les avis》に改め， 2°《nous ne sentons jamais assez au vray la foiblesse de nostre esprit》の《au vray》を削除し， 3°《le plus beau et heureux partage que Dieu aye fait est du jugement》を《...le jugement》に変えている。
3. 参照指示を欠く引用文は II-7 のテキストか。但しそこでは《perte》ではなく《peste de l'homme》（p. 383）となっている。
4. そして全てが《ex mundo est》といわれる（*Joannis Epistola*, I, 2, 16）。
5. *Jacobi Epistola*, 3, 15.
6. Cf. B. Teyssède, *Naissance du Diable* ; T. I : *De Babylone aux grottes de la mer Morte* ; T. II : *Diable et l'Enfer au temps de Jésus* (A. Michel, 1985) .
7. 例えばクロデルの登場人物において。憂国の奇蹟劇 *L'Annonce faite à Marie*, version définitive pour la scène, 《Prologue》, p.14-15, また特に Acte II, sc. 3, p.113-114, Coll. Folio

- (Gallimard, 1940) 参照。但しヴィオレーヌ本人は病を罰（しかし如何なる罪の？）としている（Ⅲ, 2. p. 160）。この点では『ベスト』におけるパヌルー神父の第一の説教と共通する。Camus, *Théâtres, Récits, Nouvelles*, p.1294-1300, La Pléiade(Gallimard, 1962) 参照。
8. M. Le Guern, *L'Image dans l'œuvre de Pascal* (1969), p. 151 (Klincksieck, 1983). そしてル・ゲルンは、パスカルが病としてベストやレブラ（クロデル上掲書参照）を用いることを指摘している（p. 152）.
 9. Cf. H. Lemaire, *Les Images chez saint François de Sales* (Nizet, 1962), cité par Le Guern, *op. cit.*, p. 154.
 10. Voir aussi fr. 460-545.
 11. テクスト：《*en s'espiaint de pres, en se tastant souvent et à toute heure, pressant et pinsant jusques au vif*》の文字通りの意味を考えよ。同じく pp. 377, 631 参照。
 12. *Encyclopédie*, T. VI (1756), art. 《Figure》, p. 769 a.
 13. フォンタニエは、(デュ・マルセに従って) 相似た定義を与えた後、主題にかかわる/かわらない括弧, 考察の/感情の括弧という二通りの二分法による識別を設けている。Fontanier, *Des Figures du discours autres que les Tropes* (1827), in *Figures du Discours*, éd. G. Genette, p. 384-386 (Flammarion, 1977).
 14. *Op. cit.*, p. 335. 民に関する同様のベシミズムは p. 551に見よ。逆に民の礼讃は p. 425に。その他の名目の定義の例, p. 216, 390...
 15. Voir J. Paulhan, *Traité des Figures* (1953), *Œuvres Complètes*, II, p. 204 (Cercle du Livre Précieux, 1966). この文彩の例もシャロンにある（p. 426）。しかしこれは別の範疇に配分すべきであろう。
 16. メタテキストの定義と種類については拙論：《『パンセ』とメタテキスト》, I, II, III, 『独仏文学』, VII (p. 1-18), VIII (p. 23-45) (山口大学, 1985, 1986), 『文学会志』, 36巻, p. 69-84 (山口大学, 1985) を参照されよ。
 17. 例：p. 370 (既出の事実と箇所), 378 (既出の箇所), 380 (予告), 385 (transition); 254, 408 (出典指示) ...
 18. 同じ議論の括弧なしでの反復（II, 11, 特に p. 527-528）参照。
 19. プルタルコスに発して書かれた『エッセ』の文は *op. cit.*, II, 12 (II, I, p. 193) に見よ。ルソーもこれを反復する（*op. cit.*, p. 141. スタロピンスキーの註, p. 1316も参照）。
 20. 他に pp. 386, 394 (いずれも初版) ...の例。
 21. 《*preud'homie*》. これは《*méchançeté*》(邪悪)の反対物であるという（p. 435）。以下《善良(さ)》と訳す。
 22. p. 358 (心理的モチーフ), 388 (言説の復習による論旨の正当化), 419 (帰結を以っての正当化), 427 (comme...で始まる理由づけ) ...
 23. 括弧に入る理由が筆者には不明の例（p. 417）もある。n. 15も参照。
 24. バルトのあるテキストの句読法は興味深い。そこには筆者の立てた項目とは別の機能をもつ括弧も出現する（もっとも『知慧論』にもその例はある（p. 430）。Voir R. Barthes, 《Introduction à l'analyse structurale des récits》, *Communications*, N° 8, p. 1 (Seuil, 1966)。